

2026/3/15 「恥を知る生き方」ヨハネ18：6-14

さ138 交読・詩編27:7-9 セ280 (261)

京都復興教会でご用させていただくのも、残り3回になりました。人間的には、最後のメッセージなんだから、喜び・祈り・感謝など、ポジティブに飾りたいなあと思います。しかし、季節はレントの折り返し地点、神様に示していただいたメッセージは、逮捕・裁判・実刑（十字架）という重いテーマでした。しかしこれこそが教会の中心、信仰の真髄です。

自ら進んでの、身代わり

イエス様の愛を、説教のみならず、讃美歌や聖画など、多くの芸術があらわしています。その色調は明るく、穏やかで、喜びと笑顔に満ちています。子どもを抱くイエス様の絵や、バツハの「主よ人の望みの喜びよ」など、大好きな作品が、すぐに思い浮かびます。

しかし、今朝の逮捕されるイエス様の姿を思うときに、そこに示された愛と、払われた犠牲が、軽々しいものではなく、どれほど重いかということに、胸が貫かれます。十字架の苦しみ、弟子たちの裏切り、死という最期。私たちのどんな体験より、はるかに残酷で、耐え難い受難であったことを示されています。その逮捕の場面で、今朝、改めて心に留めたいことは、イエス様ご自身が、自ら進んで、身代わりとなられたということです。

代わってあげる、という行為は、関係性で成り立つアクションです。どれほど、その人を大切に思っているかで、支払う犠牲の大きさも変わるものです。教会の奉仕は、神様の愛を知って、それに応答する行為です。普通の社会では、あり得ないシステムが実際に機能しているのは、イエス様の愛を信じている人たちだからなのです。

押し付けられて、不満があっても忍耐して、奉仕や仕事をすることも、実際にあります。それを思うと、イエス様が、自ら進んで、身代わりとなられたことに、次元の違う、愛なのだと再認識します。私には無理だ、どうしたらそんなふうになれるんだろう、という苦しみへのヒントは、イエス様が「私の」身代わりに進んで逮捕された、という信仰です。

悩みや苦しみはあっても、生きていてだけで、失われた命よりも幸せだということに、心が打ち砕かれます。そして、新しい自分にも出会うような思いになるでしょう。

犠牲が払われた生き方

卒業式や、門出の祝いの席で「世の中に恥じない生き方をしたい」という宣言を時折耳にします。もちろん、新しい世代が、周りの人のためになる人生を送るというビジョンに、惜しみないエールを送ります。しかし、私は一抹の不安を感じてしまいます。経験の伴わない自信は、無意識に、人を優劣で判断していることに、気づいていない危うさがあると思うからです。私が存在しなければ、生きられた命があったという謙虚さ、深い思慮があると「私は世に恥じない人間だ」とは、簡単に口に出せないと思うからです。

イエス様が、自ら進んで犠牲を払われた姿は、私たちに、自らの恥を深く悟らせます。私はそうできない、というだけでなく、私はそうまでしてもらっているのに、なお傲慢だ、という醜さを突きつけられるからです。しかし、その恥を知る生き方は、同時に、イエス様の愛によって、磨かれ、新しく造り変えられている姿だとも、言えるのではないのでしょうか。

砕かれた心には、神様の輝きが差し込みます。そして、「恥は我がもの、栄光は主のもの」と告白するとき、キリストの香りがその人から優しくただよいはじめます。

恥じない生き方でも、恥を忍んで生きる人生でもなく、自らの恥を知る生き方への招きがここに 있습니다。イエス様は、自ら進んで犠牲となられました。私たちは、その失われた命の上に、今も生かされているのです。その恵みと慈しみが、私たちを駆り立てています。